

アメリカの薬剤師教育を見て、今後求められていること

薬学部 5年

実際にアメリカの薬学生と同じように大学の授業の資料を基に生活してみて感じたことは、日本の薬学生とは違い授業前に講義資料や動画がメールで送られてきて中身を自分で確認してから授業に臨む「反転授業」が重視されていることである。また、日本では1年次に基礎科目を重点に行っていくがアメリカでは基礎を大学に入る前に行っているので1年次から臨床を見据えた授業も多く組み込まれている。学年が上がるとより臨床に力を入れて、症例を基に学生が自由に発言できるようなディスカッション方式の授業があり、日本の薬学生に求められている患者のこと、治療のことを考えて薬剤師の立場から助言できるようになるためのより知識を深める授業が行われている。

このような授業全般に言えることは全て「ガイドライン」を中心に授業が行われており、基本の薬物治療を頭に入れることでより臨床で薬剤師が活躍できる場面が増えるのではないかと感じた。実務実習に行ってみて、大学の授業ではあまりガイドラインは触れるもののアメリカのように深くは追及しないので、病院実習でガイドラインを読むこと、基本の治療を学ぶ段階からになってしまった。ガイドラインの知識があって実習に臨むことが出来ればもっとよりよい実習になったのではないかと反省点もあり、今回のアメリカ海外研修に行ってガイドラインの重要性について改めて理解することができた。

他には、患者さんをサポートするサービスが充実していると感じた。大学内にあるMTMやICUBAなどの仕事についても見学させて頂いて、遠くにいる患者さんとも電話1つでやり取りを行う。MTMでは退院後の患者さんの薬のマネジメントであり、医師からの依頼が来て患者さんにコンプライアンスの確認や薬剤に対するフォローと同時に経済面のマネジメントを行う仕事である。ICUBAは患者さんから医療費支払いの相談や先発からGEへの変更の妥当性の評価などの問い合わせが来て、サポートを置こう仕事である。

どちらも日本にはないサービスで薬剤師がこのような形で活躍できる場があり、患者さんをサポートしつつ医療費のコストを下げられることはお互いにとってとてもプラスになることであると感じた。

今回の海外研修に行ってみて、日本には感じることのできないアメリカの薬学教育・薬剤師の業務について実際に自分の目で感じる事が出来て、今後日本の薬学教育もガイドラインを取り入れた授業を増やして欲しいと感じ、今後臨床を見据えて勉強していきたいと感じた。とてもいい経験になった。